

『唐詩選』における懷古詩・辺塞詩・送別詩・閨怨詩の収録状況 ―『唐詩三百首』との比較を通じて―

馬 艶 艶

はじめに

漢詩を含む漢文学は日本に伝来してから長い歴史を持ち、多くの日本人に親しまれてきた。奈良時代に『王勃集』、平安前期に『白氏文集』が流行したことから、日本においては、同時代の中国で流行していた新しい漢詩集が早い段階で伝来する傾向があったことが分かる¹⁾。その中で、日本では江戸時代に伝えられた明代末期の『唐詩選』が愛読されており²⁾、現在に至っても、重要な唐詩入門書と認められている。なぜ、日本においては『唐詩選』が流行したのだろうか。

日本における『唐詩選』流行の要因に関する研究は、これまで様々な視点から行われてきた。流行の要因として挙げられているのは、①『唐詩選』が和刻される前に、『唐詩選』の内容を元に編纂され、流行していた『唐詩訓解』の貢献³⁾、②『唐詩選』は所収詩の詩体・詩人などの点から見ると、『三体詩』、『唐宋聯珠詩格』、『瀛奎律髓』などの唐詩選集より優れること⁴⁾、③荻生徂徠・服部南郭ら古文辞派の評釈・校訂等の活動による奨励⁵⁾、④印刷業の繁栄⁶⁾、⑤江戸時代の知識人層の拡大⁷⁾という五

つである。そのうち②以外の要因は、外的要因といえる。②だけは『唐詩選』の内容に要因を求めており、詩体、詩人、作成時期、主題等を他の唐詩選集と比較しながら考察した結果である。

その中で、前野直彬氏は『唐詩選』に収録された詩の主題について、「懷古・送別・旅愁の詩ばかり選びすぎたことは昔から言われている批判である」⁸⁾と述べている。また、日野龍夫氏によつて、『唐詩選』には惜別・辺愁・閨怨等の悲哀を詠じた作品が多く、日本人の心情に訴える⁹⁾ことが指摘されている。

しかし、二つの先行研究において指摘された懷古・送別・旅愁・惜別・辺愁・閨怨などといった主題については、実際に『唐詩選』にはこれらの主題の詩が本当に多いかどうか研究は行われていない。たとえば、『唐詩選』が惜別・辺愁・閨怨等の悲哀を詠じた作品に富むという日野氏の指摘に対して、『唐詩選』収録詩の主題の割合を確認する研究は行われていない。そこで、本論文では、まずは『唐詩選』における懷古詩・辺塞詩・送別詩・閨怨詩に着目し、統計的に調査し、主題からみる『唐詩選』の特徴を究明することにした。

ただし、主題からみる『唐詩選』の統計だけでは、偏りがあるかどうか判断できないため、他の唐詩選集と比較することによって、『唐詩選』の特徴をより客観的に把握することにした。その際に筆者は『唐詩三百首』を選んだ。現在でも中国で大流行している『唐詩三百首』には、大川忠三氏の指摘によれば、詠懷・辺塞・送別・懷古・紀行・詠物・登高・艷情などいろいろなテーマの詩が幅広く取り挙げられているという¹⁰⁾。この点から、『唐詩三百首』は、比較の基準とするのにふさわしい唐詩選集なのである。

また、『唐詩選』と『唐詩三百首』における懷古詩・辺塞詩・送別詩・閨怨詩といった主題の基準を決めるのに、筆者の判断のみでは、恣意的になる可能性がある。そこで、客観性を保つために、本論文では『唐詩類苑』を参照することにした。『唐詩類苑』は、明代の万曆（一五七三―一六二〇）の時点で、集め得た限りの唐詩を主題によって分類した唐詩の全集である。『唐詩選』と『唐詩三百首』のほとんどの詩が収録されているため、二つの選本に収録された詩の主題を把握するのに適していることから、本論文では『唐詩類苑』を参照しながら、『唐詩選』と『唐詩三百首』における懷古詩・辺塞詩・送別詩・閨怨詩の収録状況を統計することにした。

さらに、本論文の後半では、『唐詩選』と『唐詩三百首』における懷古詩・辺塞詩・送別詩・閨怨詩の収録状況の調査結果を、『唐詩選』の影響を受けた江戸文学作品の特徴と比べ、それが江戸時代における『唐詩選』の流行との関連性を示唆することについても触れたい。

一 『唐詩選』と『唐詩三百首』所収詩の主題の比較

『唐詩類苑』においては、詩の主題は「部」に分けられ、部はさらに「類」と呼ばれる小項目に分けられる。具体的には、人部、天部、歳時部、地部、山部、水部、京都部など計三九部に主題が分けられ、人部にはさらに九四類の小項目がある。

『唐詩選』収録詩四六五首のうち、四三五首が『唐詩類苑』にも収録されており、三〇首は収録されていない。一方、『唐詩三百首』は三二一首のうち、二九八首が『唐詩類苑』にも収録されており、二三首は収録されていない。収録されていない詩は『唐詩類苑』の分類の方法を参考にし、筆者が主題を分類した。以下では、『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合と、筆者が分類した詩を加えた場合との両方の結果を示すことにする。前述したように、前野氏の懷古と、日野龍夫氏の惜別・辺愁・閨怨といった主題の分類はどのような基準で決められているかについて言及していない。そのため、これから、『唐詩選』と『唐詩三百首』所収詩のうち懷古詩・辺塞詩・送別詩・閨怨詩が『唐詩類苑』においてどの部別と類別に分類されているかを調査し、それぞれの選本における懷古詩・辺塞詩・送別詩・閨怨詩の収録状況について統計的な調査を行う。

二 『唐詩選』と『唐詩三百首』における懷古詩

前野氏は懷古・送別・旅愁の詩を選びすぎたとの批判があると指摘しているが、後述の日野氏と異なり、具体

例を挙げていない。このうち、旅愁については、『唐詩類苑』における分類において、「人部」の「行役」・「羈旅」・「帰国」・「還郷」・「貶謫」・「流徙」など様々な分類があり、具体的にどのような詩を指すか不明であるため、本論文の考察の対象から外すことにした。また、送別については、日野氏の惜別とまとめて、後述することにする。本章では、懷古について考察する。「懷古」という主題に該当するものには、『唐詩類苑』の「人部」の「懷古」類がある。例えば、次のような詩が収められる。

●李白「蘇臺覽古」(『唐詩選』¹¹⁾)

舊苑荒臺楊柳新 舊苑荒臺 楊柳新たなり
菱歌清唱不勝春 菱歌清唱 春に勝へず
只今惟有西江月 只今 惟だ 西江の月のみ有り
曾照吳王宮裏人 曾て照らす 吳王宮裏の人

この詩の詩題に含まれる「蘇臺」は、吳王によって姑蘇山に建てられた「姑蘇臺」を指しており、詩句に含まれる「吳王宮裏人」は、戦いに敗れた越王勾践から吳王夫差に送られた絶世の美女の西施のことである。この詩は李白が古跡を訪れて詠じたものである。

比率の面から『唐詩選』と『唐詩三百首』における懷古詩を比較したい。

『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合、『唐詩選』においては、「人部」の「懷古」類詩が八首あり、全詩四三五首

の一・八四%を占めているのに対して、『唐詩三百首』においては、「人部」の「懷古」類詩が一二首あり、全詩二九八首の四・〇三%を占めている。(附表一)

一方、筆者の主題を分類した詩を加えた場合、「人部」の「懷古」類詩が八首あり、全詩四六五首の一・七二%を占めているのに対して、『唐詩三百首』においては、「人部」の「懷古」類詩が一二首あり、全詩三二一首の四・〇五%を占めている。(附表二)

どちらの場合でも『唐詩三百首』は『唐詩選』の二倍以上の割合で、懷古の詩が収められていることが分かる。『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合でも、筆者の主題を分類した詩を加えた場合でも、前野氏の指摘と異なり、『唐詩選』における懷古詩は、『唐詩三百首』より少ないことが分かった

三 『唐詩選』と『唐詩三百首』における辺塞詩

日野龍夫氏は『唐詩選』が辺愁の詩に富むと指摘するほか、『唐詩選』と近世後期詩壇―都市の繁華と古文辞派の詩風―¹²⁾において、川柳などに引用される頻度を検証し、『唐詩選』の中でどのような作品が人々に好まれていたかについて、(イ) 都会の繁華を詠むもの、(ロ) 「古意」、「宮怨」などの艷詞、(ハ) 辺境を詠むものに弁別している。

そして、(ハ) 辺境を詠むものに関しては、「関山月」・「涼州詞」・「從軍行」など八首の詩題が挙げられ、辺境

の風物感慨を詠じた「從軍行」・「塞上曲」などの詩は悲壮で感傷的な詩情が人々に愛されたと述べている。

日野氏の先行研究に挙げられている辺境を詠じた詩題を『唐詩類苑』の部別に照らし合わせた結果、「辺塞部」と「武部」に分けて収録されていた。そのため、本論文では、『唐詩類苑』の分類基準を参照し、『唐詩選』と『唐詩三百首』において「辺塞部」と「武部」に分類されている詩を、辺境を詠じた詩、つまり辺塞詩と定義する。ただし、武部に分類されている詩のうち、明らかに辺塞を舞台としていない詩は除く。¹³⁾

『唐詩類苑』においては、「邊塞部」の下に、「總邊」・「塞上」・「出塞」・「薊門」など三〇類が分類されており、「武部」の下に「刀」・「從軍」・「行營」・「凱旋」・「赴軍」など三三類が分類されている。

そのうち、『唐詩選』における辺塞詩は「辺塞部」の「總邊」・「塞上」・「薊門」・「巡邊」・「出塞」類と「武部」の「從軍」・「凱旋」・「行營」・「烽」・「刀」・「戰伐」・「觀兵」・「幕府」・「赴軍」類に含まれている。『唐詩三百首』においては、「辺塞部」の「總邊」・「塞上」・「塞下」・「涼州」類と「武部」の「戰伐」・「從軍」類に含まれている。『唐詩選』における「辺塞部」の「總邊」類の詩を実例として挙げる。

●岑参「磧中作」(『唐詩選』)

走馬西來欲到天 馬を走らせて西來 天に到らんす
辭家見月兩回圓 家を辭して月の兩回圓かなるを見る

当に辺塞詩に富んでいるかについて、『唐詩三百首』と比較してみた。

『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合、『唐詩選』において、「辺塞部」の「總邊」類が二三首、「塞上」・「薊門」・「巡邊」・「出塞」類が各一首あり、「武部」の「從軍」類が五首、「凱旋」類が四首、「行營」類が二首、「烽」・「刀」・「戰伐」・「觀兵」・「幕府」・「赴軍」類が各一首あり、つまり、「辺塞部」と「武部」を合わせて四四首あり、『唐詩選』全詩四三五首の一〇・一一%を占めている。一方、『唐詩三百首』において、「辺塞部」と「武部」を合わせて一五首あり、『唐詩三百首』全詩二九八首の五・〇三%を占めている。(附表三)

筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』において、「辺塞部」の「總邊」類が二四首、「塞上」類が三首、「薊門」・「巡邊」・「出塞」類が各一首で、「武部」の「從軍」類が五首、「凱旋」類が四首、「行營」・「烽」類が各二首で、「刀」・「戰伐」・「觀兵」・「幕府」・「赴軍」類には各一首で、つまり、「辺塞部」と「武部」を合わせて四八首あり、『唐詩選』全詩四六五首の一〇・三二%を占めている。(附表四)

一方、筆者の主題を分類した詩を加えた場合でも、『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合でも、『唐詩三百首』において、「辺塞部」の「總邊」類が九首で、「塞上」・「塞下」・「涼州」類が各一首ずつで、「武部」の「戰伐」類が二首で、「從軍」類が一首あり、「辺塞部」と「武部」を合わ

今夜不知何處宿 今夜知らず 何れの處にか宿せん
平沙萬裏絶人烟 平沙萬裏 人烟を絶つ

「磧中作」は、詩人の実際の体験に基づき、作られた詩という。辺境に赴き、家から出てもう二か月経ったという描写で、月を見て時間を数えることから詩人の望郷の愁いを感じられる。泊まるころも砂漠しかないという描写は、辺境の過酷な環境に湧いてくる望郷の思いがより強く感じられる。

次に、『唐詩選』の「武部」の「從軍」類の実例を挙げる。

●王昌齡「從軍行」(『唐詩選』)

青海長雲暗雪山 青海の長雲 雪山暗し
孤城遙望玉門關 孤城遙かに望む 玉門關
黃沙百戰穿金甲 黃沙百戰 金甲を穿つ
不破樓蘭終不還 樓蘭を破らざれば終に還らじ

この詩は、樓蘭を打ち破ることができなければ、どうしても帰ってくることはないという描写から、辺境に行つて、威勢よく気張つてみせる兵士の心意気を感じられる。

以上、『唐詩選』の「邊塞部」と「武部」を通して、詠う内容は様々であるが、いずれも辺境に関する詩であることを確認した。

以下、これらの詩の比率の面から見て、『唐詩選』は本

せて一五首である。

筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩三百首』において、「辺塞部」と「武部」の詩が一五首あり、全詩三二一首の四・六七%を占めている。

『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合でも、筆者の主題を分類した詩を加えた場合でも、『唐詩三百首』より、『唐詩選』における「辺塞部」と「武部」の詩の方が全詩における割合が高いことが分かった。日野氏が述べているように、『唐詩選』には、『唐詩三百首』に比べて、辺塞詩が多いことが分かった。

四『唐詩選』と『唐詩三百首』における送別詩

日野氏の二つの先行研究においては、『唐詩選』には惜別の詩が多いという指摘があったが、どのような詩が惜別の詩なのか、言及されていない。

本論文では、送別詩と捉えることにし、まず、その定義について述べる。送別に関連しそうな『唐詩類苑』の分類は、「送」もしくは「別」を含む「入部」の「送」・「別」・「送別」・「留別」・「贈別」・「話別」・「酬別」・「寄別」・「宴別」の九類であった。

送別詩に関連しそうな『唐詩類苑』の九類において、作詩者は送る側と旅立つ側に分かれ、場面は宴席などに分けられるが、詩題にその類別名が含まれることと、離別の際に作られた詩であることが共通点である。本論文では、送る側と送られる側、送別の場面などで分けることなく、離別の際に作られた詩をすべて送別詩と定義し、統計的な調査を行うこととする。

送別詩に該当するのは、『唐詩選』においては「人部」の「送」・「別」・「送別」の三つの類、『唐詩三百首』においては「送」・「別」・「送別」・「贈別」・「留別」の五つの類である。

比率から見ると、『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合、『唐詩選』において「人部」の「送」・「別」・「送別」に分類される詩はそれぞれ一三首、七首、一首で、全部で二一首あり、『唐詩選』四三五首の四・八三％を占めている。一方、『唐詩三百首』において「送」・「別」・「送別」・「贈別」・「留別」に分類される詩はそれぞれ六首、四首、二首、二首、一首で、全部で一五首あり、『唐詩三百首』の二九八首の五・〇三％を占めている。（附表五）

一方、筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』において「人部」の「送」・「別」・「送別」に分類される詩はそれぞれ一六首、七首、一首で合わせて二四首あり、全詩四六五の五・一六％を占めている。一方、『唐詩三百首』において「送」・「別」・「送別」・「贈別」・「留別」に分類される詩はそれぞれ、六首、五首、二首、二首、一首で、全部で一六首あり、『唐詩三百首』全詩三二一首の四・九八％を占めている。（附表六）

以上、『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合でも、筆者の主題を分類した詩を加えた場合でも、『唐詩選』における送別詩の割合は、『唐詩三百首』とあまり変わらないことが分かった。『唐詩選』に送別詩が特に多いとは言えないのである。

筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』において、「人部」の「幽怨」詩には「吳宮怨」（衛萬）、「怨情」（李白）など合計一五首あった。ここでは、王昌齡の「閨怨」を挙げる。

●王昌齡「閨怨」（『唐詩選』）

閨中少婦不知愁 閨中の少婦 愁を知らず
春日凝粧上翠樓 春日 粧を凝らして翠樓に上る
忽見陌頭楊柳色 忽ち見る 陌頭 楊柳の色
悔教夫婿覓封侯 悔ゆらくは 夫婿をして封侯を覓めしめしを

この詩は妻がその夫と別れている怨みの詩である。また、筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』において、「人部」の「閨情」詩には「古意」（沈佺期）、「靜夜思」（李白）など合計一三首あった。

「人部」の「閨情」詩の具体例を挙げる。

●張仲素「秋閨思」（『唐詩選』）

碧窗斜月靄深輝 碧窗の斜月 深輝靄たり
愁聽寒蛩淚濕衣 寒蛩を愁ひ聽きて 淚衣を濕す
夢裏分明見關塞 夢裏 分明に關塞を見る
不知何路向金微 知らず 何れの路か金微に向ひし

この詩の詩題は、「女性の秋の閨のもの思い」の意で、

五『唐詩選』と『唐詩三百首』における閨怨詩

前述したように、日野龍夫氏は『唐詩選』と近世後期詩壇―都市の繁華と古文辞派の詩風―において、（ロ）「古意」「宮怨」などの詩を艷詞に弁別している。また、艷詞は『唐詩選』のなかでは大きな比重を占める領域であり、「閨怨」や「章台柳」など、男女の情を主題とする詩が、『三体詩』などに比べて『唐詩選』では格段に増えたことが『唐詩選』の流行の要因とされているが、好まれた「艷詞」とは具体的にどのような判断しているのかについて、説明が行われず、ただ、「烏夜啼」・「古意」・「独不見」など具体的な詩題一九首が挙げられているだけである。

また、『唐詩選国字解一』においては、日野氏は「閨怨」と表現しているが、艷詞と重なるものと考えられる。

日野氏の前掲論文において、「艷詞」として挙げられている作品を『唐詩類苑』の主題の調査に照らし合わせると、楽府に分類される詩を含むため、完全に重なるわけではないが、「人部」の「閨情」類と「幽怨」類に重なる詩が多かった。

そのため、日野氏の「閨怨」や「艷詞」と一番近い部別や類別は、「人部」の「幽怨」類と「閨情」類になると判断し、『唐詩選』と『唐詩三百首』において、「人部」の「幽怨」類と「閨情」類の詩数や割合等の状況を比較することにした。これにより、『唐詩選』に本当に「閨怨」や「艷詞」が多いかどうかについて考察できると思われる。

辺境に行った夫を思う女性を描いている。

上記、二つの実例とも、女性の思いを描いた詩であったが、『唐詩類苑』においてはそれぞれ、「幽怨」類と「閨情」類に分類されている。「人部」の「幽怨」詩と「閨情」詩の相違点に関しては、「人部」の「幽怨」詩に分類されている詩の詩題に「怨」が含まれる詩が多く、内容から見ると、女性の怨みを描くものが多かった。一方、「人部」の「閨情」類に分類されている詩の詩題に「閨」・「思」・「意」などが含まれる詩が多く、内容から見ると、女性の思いに限らず、男性の望郷などの思いを詠じる詩もあった。『唐詩選』における「人部」の「幽怨」詩と「人部」の「閨情」詩の共通している所は、人間の哀愁等の情を詠じている詩であると思われる。

本論文では「人部」の「幽怨」詩と「人部」の「閨情」詩を合わせて日野氏のいう閨怨詩に当たると考えることにする。以下、『唐詩選』と『唐詩三百首』において、「人部」の「幽怨」詩と「人部」の「閨情」詩の詩数や割合等の状況を比較して、『唐詩選』に本当に閨怨詩が多いかどうかについて考察する。

附表七と附表八はそれぞれ、『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合と、筆者の主題を分類した詩を加えた場合、「人部」の「幽怨」詩と「閨情」詩の割合を示す。

『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合、『唐詩選』において、「人部」の「幽怨」詩が一〇首で、「閨情」詩が二三首で、閨怨詩が全部で二三首あり、全詩四三五首の五・二九

%を占めている。『唐詩三百首』において、「人事部」の「幽怨」詩が七首で、「閨情」詩が二四首で、閨怨詩が全部で三一首あり、全詩二九八首の一〇・四〇%を占めている。

一方、筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』において、「人事部」の「幽怨」詩が一五首で、「閨情」詩が一三首で、つまり閨怨詩が全部で二八首あり、全詩四六五首の六・〇二%を占めている。『唐詩三百首』において、「人事部」の「幽怨」詩が九首で、「閨情」詩が二六首で、閨怨詩が全部で三五首あり、全詩三二一首の一〇・九〇%を占めている。

上記、『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合でも、筆者の主題を分類した詩を加えた場合でも、先行研究の指摘とは異なり、『唐詩選』においては、『唐詩三百首』より、閨怨詩が少ないことが分かった。『唐詩選』には閨怨詩も特に多いとは言えないのである。

以上、『唐詩類苑』の主題への分類の基準を参照しながら、『唐詩三百首』との比較を通じて、『唐詩選』における懷古詩・辺塞詩・送別詩・閨怨詩の収録状況を把握することができた。

『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合でも、筆者の主題を分類した詩を加えた場合でも、先行研究の指摘と同じく、『唐詩三百首』より、『唐詩選』においては辺塞詩が多いことが分かった。また、先行研究の指摘とは異なり、『唐詩三百首』より『唐詩選』における送別詩には大きな差が

なかったことと、『唐詩選』においては懷古詩と閨怨詩が少ないことが分かった。

先行研究の指摘のうち、実際に多かったのは辺塞詩のみであった。送別詩には大きな差はなく、懷古詩と閨怨詩は『唐詩三百首』より少なかったのである。

六『唐詩選』の影響を受けて二次創作された『通詩選』と『通詩選諺解』

日野氏の先行研究によれば、『唐詩選』には惜別・辺愁・閨怨詩など人間の情を自然に描く詩に富むことが、『唐詩選』が荻生徂徠ら古文辞派に好まれ、ないし江戸時代の日本人に好まれた要因であるという。

しかし、これまで見てきたように、『唐詩類苑』を用い、『唐詩選』における懷古詩・辺塞詩・送別詩・閨怨詩の収録状況を把握したところ、先行研究の指摘と一致するところもあり、一致しない結果も出た。

主題から把握できた『唐詩選』の特徴と『唐詩選』が江戸時代に流行した要因との間には何か関係があるだろうか。特に、先行研究の指摘と異なり、『唐詩三百首』と『唐詩選』における送別詩には大きな差がなく、『唐詩選』においては懷古詩と閨怨詩は少ないのに、『唐詩選』にはそのような詩が多いとされたことと、関連はあるだろうか。

この問いに答えるために、本章では、『唐詩選』の影響を受け、『唐詩選』を基にして創作された二次作品の調査を通して、『唐詩選』の流行の状況について把握し、具体

的に『唐詩選』所収詩のどの作品が好まれたかについて推察する。

『唐詩選』が江戸文学に与えた影響の先行研究によれば、『唐詩選』は江戸文学の画本・狂歌・習字の手本・歌留多・都々逸・洒落本・読本・和歌・劇作など、様々な分野に影響を与え、様々な二次創作の作品が残されているという。そこで、これらの『唐詩選』の二次創作の作品を考察することによって、具体的に『唐詩選』のどのような詩が好まれたかを推測できるのではないかと思われる。

先行研究に取り上げられている『唐詩選』の影響を受けた江戸文学の作品のうち、本論文では、『唐詩選』の影響を受けて二次創作された『通詩選三部作』を分析の対象にした。

『通詩選三部作』とは、『通詩選笑知』・『通詩選』・『通詩選諺解』のことである。『通詩選三部作』のうち、『通詩選笑知』は『唐詩選』巻六「五言絶句」の一部の詩に基づいて二次創作された狂詩を収め、『通詩選』は同巻二「七言古詩」の一部の詩に基づいた狂詩を収め、『通詩選諺解』は同巻七「七言絶句」の一部の詩に基づいた狂詩を収めている。

さらに、『通詩選笑知』・『通詩選』・『通詩選諺解』が『唐詩選』のどの詩に基づき二次創作されたか確認したところ、『通詩選三部作』のうち、『通詩選笑知』は巻六の五言絶句全七四首のうち七〇首を対象にしており、内容に関係なく、ほとんどの詩に区別せずに二次創作され

ていると考えられるため、ここでは、分析の対象から外すことにした。『通詩選』は巻二の七言古詩全三二首のうち、一八首を対象にし、『通詩選諺解』は巻七の七言絶句全一六五首のうち、五〇首を対象としたものであり、いずれも対象を取捨選択しながら二次創作された狂詩集であることから、分析の対象とすることにした。^[15]ここでは、一つの実例を出す。

●大門「郭中禮日」^[16]

正月二日酒盃臺	正月二日	酒盃臺
茶席茶筵勸客杯	茶席茶筵	客に勧むる杯
人情已厭舊冬苦	人情已に厭ふ	舊冬の苦
高慢那從北里回	高慢那ぞ	北里より回る

『唐詩選』における原詩は下記の通りである。

●王勃「蜀中九日」(『唐詩選』)

九月九日望鄉臺	九月九日	望鄉臺
他席他鄉送客杯	他席他鄉	客を送る杯
人情已厭南中苦	人情已に厭ふ	南中の苦
鴻雁那從北地來	鴻雁那ぞ	北地より来る

狂詩が日本でつくられた、漢詩体の詩の一種で、押韻、平仄など漢詩の作法に従いながら俗語、卑語を交えて、滑稽、洒脱を主としたものと知られている「16」。また、『通詩選』と『通詩選諺解』が『唐詩選』の影響を受け、『唐詩選』の原詩を元にしてパロディされたものである。

ここで挙げている「蜀中九日」が『唐詩選』第七卷七言絶句の第一首であり、『唐詩類苑』においては、「歳時部」の「九月九日」に分類されている。太田南畝により、『通詩選診解』において、「郭中禮日」に作られた。

これらの『通詩選』の一八首と『通詩選診解』の五〇首の原詩が、それぞれ『唐詩類苑』においてどの主題に分類されているか分析すれば、江戸時代において、『唐詩選』所収詩の中で、どのような詩が実際に好まれたかを推測できると思われる。

『通詩選』の一八首と『通詩選診解』の五〇首の原詩が、それぞれ『唐詩類苑』においてどの主題に分類されているかを分析した結果を、附表九に示す。『通詩選』の一八首と『通詩選診解』の五〇首の原詩が『唐詩類苑』において、一八部に分類されている。

『通詩選』と『通詩選診解』の原詩において、辺塞詩に關しては、「辺塞部」と「武部」には各四首で、合わせて八首あり、全原詩六八首の一・七六%を占めている。すなわち、辺塞詩が多く作られたことが分かった。

また、『唐詩選』所収詩の各部の順位と同じく、『通詩選』と『通詩選診解』の原詩においても、「人部」の詩数が二六首あり、全詩六八首の三八・二四%を占めており、第一位になっている。「人部」の下の各類の詩数状況を見てみよう。『通詩選』と『通詩選診解』「人部」各類原詩順位状況を附表十に示す。

附表十から、『唐詩類苑』において、『通詩選』と『通

詩選』より少ないことが分かった。

なぜ、『唐詩選』には閨怨詩・送別詩・懷古詩は少ないのに、先行研究に閨怨詩・送別詩・懷古詩が多いと指摘されているかについては、恐らく、二次創作された作品において、閨怨詩・送別詩・懷古詩が沢山踏まえられたため、逆に『唐詩選』には閨怨詩・送別詩・懷古詩が多いというイメージができたのではないかと考えられる。

今後は、『三体詩』と『瀛奎律髓』などの『唐詩選』が日本に登場する前の唐詩選本を比較の対象に付け加え、さらに『唐詩選』が流行した要因を明らかにしたい。

また、『唐詩選』が江戸文学に与えた影響について、本論文では、『通詩選三部作』の『通詩選』と『通詩選診解』だけを対象として考察したが、他の分野の考察はできなかった。そのため、今後、『唐詩選』が江戸文学及び江戸の文学者に与えた影響について、より全面的に考察したい。

注

〔1〕水田紀久・頼惟勤編『日本漢学』（大修館書店 中国文化叢書九 一九六八 四〇六頁）

〔2〕例えば、日野龍夫氏は次のように指摘している。「校注者が寓目した限りで、小本『唐詩選』には初版から幕末の万延元年（一八六〇）まで百四十年ほどの間に十四の版があり、すべて版木が異なっている。版木は通常五、六千部印刷すると磨滅して、新たに彫り直すのであるから、かりに右の

詩選診解』の原詩が「人部」において、全部で一四類に分類されている。「幽怨」類の詩が六首あり、一番多いことが注目される。また、「閨情」類の詩が一首ある。閨怨詩には「幽怨」・「閨情」二類の詩が含まれているため、『通詩選』と『通詩選診解』の「幽怨」・「閨情」類の原詩は全部で七首あり、全詩六八首の一〇・二九%を占めており、『通詩選』と『通詩選診解』の原詩には閨怨詩が多いことが分かった。このことは、閨怨詩が日本人に好まれ、二次創作されたことを反映していると思われる。

次に、『通詩選』と『通詩選診解』の原詩で送別詩に關連する部別は「送」のみであるが、「送」類は三首あり、全詩六八首の四・四一%を占めており、第三位になっている。送別詩も日本人に好まれ、やや多く二次創作されたことを反映していると思われる。

最後に『通詩選』と『通詩選診解』の原詩には懷古詩が二首あり、全詩六八首の二・九四%を占めている。「人部」の第四位になっており、やはり二次創作がやや多いことが分かった。

おわりに

前述のように、『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合でも、筆者が主題を分類した詩を加えた場合でも、『唐詩三百首』と比較した場合、『唐詩選』に確かに多いと判断されるのは、辺塞詩のみであった。また、先行研究の指摘と異なり、『唐詩三百首』と『唐詩選』における送別詩には大きな差

十四の版を各版五千部ずつとして、やはり数種の版のある半紙本をこれに加えれば、十万部に近い数字が出る。」（日野龍夫校注『唐詩選国字解一』平凡社東洋文庫 一九八二 一七頁）

また、村上哲見氏は以下のように述べている。「……日野氏はそれらを合わせた印刷総数を「十万部に近い」と推定しておられる。これは木版印刷の時代において、驚くべき数字といわねばならない。しかもそれは異版十四種を前提にしているので、二十種となれば、更に大きな数字が考えられてよい。」（村上哲見『漢詩と日本人』講談社選書メチエ 一九九四 一九六頁）

〔3〕すなわち享保九年以前、近世の初期から、『唐詩選』は『唐詩訓解』という形で和刻されていたといつてよいのである。いうまでもなく和刻本は唐本より普及しやすい。」（注〔2〕前掲日野氏書 一〇頁）

〔4〕この点に言及している本は多く、ほとんど『唐詩選』の注釈書の解題や序に書かれているが、ここでは筆者が主に参照したものを挙げる。

・久保得二校訂（芸閣玄之口述）『唐詩選・三體詩』（東京博文館 一九一三 七頁）

・川上天山著、幸田露伴監脩『詳解全譯漢文叢書第七卷 唐詩選』（至誠堂書店 一九二七年 六頁）「……殊に古今の各體を採録按排せる所は初學に取りて便益多きを以て、おのづから興味を惹きて、更に傳播に力を添へたものであらう。」・簡野道明『唐詩選詳説上』（明治書院 一九二九 一二頁）「之に反して唐詩選は體製から言つても……あらゆる古今體を兼ね、時代から言つても前に示した如く初・盛・中・晩に互

り、作者から言っても一百二十八人の多きに及んでゐるから……其の他種の批難すべき点もあるけれども、之を三體唐詩や聯珠詩格に比べて見れば、選集本として先づ其の體を得たものと謂つてよからう。」

・目加田誠『唐詩選』（明治書院 新釈漢文大系一九 一九六四 四頁）「又、森槐南は唐詩選の選び方に甚だあきたらぬ意を示しているが、しかも通行の詩本の中比較的上位にあるものと推薦した。」

・斎藤响『唐詩選』（集英社 漢詩大系六 一九六四 一〇頁）「もちろん、前に述べたように、それは瀛奎律髓や聯珠詩格や三體詩のような部分的な紹介にとどまらず、いちおう、唐詩の諸體を紹介したものであつて、しかも分量がきわめて手頃であるということも有力な原因になつてゐるであらう。」

[5] 注[4]に挙げた参考書のように、この点に言及している本も多く、各注釈書の解題や序に書かれている。ここでは、注[4]以外に参照したものを書ける。

・平野彦次郎『唐詩選研究』（明徳出版社 一九七四 二八頁）

[6] 注[2]前掲村上氏書および日野龍夫『唐詩選』と近世後期詩壇―都市の繁華と古文辞派の詩風』（岩波書店 『文学』三九（三） 一九七二）

[7] 注[2]前掲村上氏書および吉川幸次郎・小川環樹（編）『筑摩叢書 唐詩選上』（筑摩叢書 二〇〇〇 ii頁）

[8] 前野直彬（注解）『唐詩選』（岩波文庫 一九八四 九頁）

[9] 注[2]前掲日野氏書および注[6]前掲論文

[10] 大川忠三『唐詩三百首』（明徳出版社 一九八四 二五～二

六頁）

[11] 本論文で挙げた『唐詩選』の詩句はすべて目加田誠氏の『唐詩選』から引いたものである。

[12] 注[6]前掲論文

[13] 例え、〔武部〕の「八陣圖」である。

[14] 二次創作に当たっては、単に二次創作を作りやすい詩が選ばれたとも考えられるが、ここでは、広く知られている作品の方がより二次創作されやすかったと考えることにする。

[15] 狂詩の原詩は国文学研究資料館に公開されたオンライン資料を引用し、訓読は目加田誠氏の訓読を参考にし、筆者が付けたものである。 (<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100190453/571n1ja> 閲覧日：二〇一三年三月一九日)

[16] 狂詩に関する解釈は「Japan Knowledge Lib」を参照したものである。 (<https://japanknowledge.com/11b/display/7?id=20020121d0e8m02H1pkf> 閲覧日：二〇一三年四月二八日)

また、「京都帝国大学国文学会」は『江戸文学図録』藤井博士還暦記念「解説篇」において、「曰く黄表紙、曰く洒落本、曰く川柳、曰く狂歌、曰く狂文、何でも洒落のめし滑稽化しようとするのは、明和から安永・天明にかけての江戸文壇の風潮であつた。狂詩もまたこの時代相の反映として現はれた一種戯謔の文字である。勿論漢詩の體を假つて滑稽の言を弄するのは、必しも當時に始つた事ではない。」と記述している。（京都帝国大学国文学会編『江戸文学図録』藤井博士還暦記念「解説篇」 一九三〇 一〇〇頁）

附表1 『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合、『唐詩選』と『唐詩三百首』における懷古詩

類名	唐詩選		唐詩三百首	
	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
懷古	8	1.84	12	4.03

附表2 筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』と『唐詩三百首』における懷古詩

類名	唐詩選		唐詩三百首	
	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
懷古	8	1.72	13	4.05

附表3 『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合、『唐詩選』と『唐詩三百首』における辺塞詩

部名	類名	唐詩選		唐詩三百首	
		詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
邊塞部	總邊	23	5.29	9	3.02
	塞上	1	0.23	1	0.34
	薊門	1	0.23	0	0.00
	巡邊	1	0.23	0	0.00
	出塞	1	0.23	0	0.00
	塞下	0	0.00	1	0.34
	涼州	0	0.00	1	0.34
武部	從軍	5	1.15	1	0.34
	凱旋	4	0.92	0	0.00
	行營	2	0.46	0	0.00
	烽	1	0.23	0	0.00
	刀	1	0.23	0	0.00
	戰伐	1	0.23	2	0.67
	觀兵	1	0.23	0	0.00
	幕府	1	0.23	0	0.00
	赴軍	1	0.23	0	0.00
合計		44		15	5.03

附表6 筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』と『唐詩三百首』における送別詩

類名	唐詩選		唐詩三百首	
	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
送	16	3.44	6	1.87
別	7	1.51	5	1.56
送別	1	0.22	2	0.62
贈別	0		2	0.62
留別	0		1	0.31
合計	24	5.16	16	4.98

附表7 『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合、『唐詩選』と『唐詩三百首』における閨怨詩

類名	唐詩選		唐詩三百首	
	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
幽怨	10	2.3	7	2.35
閨情	13	2.99	24	8.05
合計	23	5.29	31	10.40

附表8 筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』と『唐詩三百首』における閨怨詩

類名	唐詩選		唐詩三百首	
	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
幽怨	15	3.23	9	2.80
閨情	13	2.80	26	8.10
合計	28	6.02	35	10.90

附表9 『通詩選』と『通詩選詳解』原詩の各部主題順位状況

	部別	詩数	全詩における割合
1	人部	26	38.24
2	居處部	6	8.82
3	花部	4	5.88
4	京都部	4	5.88
5	武部	4	5.88
6	邊塞部	4	5.88

附表4 筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』と『唐詩三百首』における邊塞詩

部名	類名	唐詩選		唐詩三百首	
		詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
邊塞部	總邊	24	5.16	9	2.80
	塞上	3	0.65	1	0.31
	薊門	1	0.22	0	0.00
	巡邊	1	0.22	0	0.00
	出塞	1	0.22	0	0.00
	塞下	0	0.00	1	0.31
	涼州	0	0.00	1	0.31
武部	從軍	5	1.08	1	0.31
	凱旋	4	0.86	0	0.00
	行營	2	0.43	0	0.00
	烽	2	0.43	0	0.00
	刀	1	0.22	0	0.00
	戰伐	1	0.22	2	0.62
	觀兵	1	0.22	0	0.00
	幕府	1	0.22	0	0.00
	赴軍	1	0.22	0	0.00
合計		48	10.32	15	4.67

附表5 『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合、『唐詩選』と『唐詩三百首』における送別詩

	類名	唐詩選		唐詩三百首	
		詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
1	送	13	2.99	6	2.01
2	別	7	1.61	4	1.34
3	送別	1	0.23	2	0.67
4	贈別	0		2	0.67
5	留別	0		1	0.34
	合計	21	4.83	15	5.03

7	水部	3	4.41
8	歳時部	3	4.41
9	山部	2	2.94
10	鳥部	2	2.94
11	天部	2	2.94
12	服食部	2	2.94
13	樂部	1	1.47
14	果部	1	1.47
15	職	1	1.47
16	地部	1	1.47
17	木部	1	1.47
18	釋部	1	1.47
	合計	68	100.00

附表10 『通詩選』と『通詩選詳解』「人部」各類原詩順位状況

	部（類名）	詩数	全詩における割合
1	人部（幽怨）	6	8.82
2	人部（行役）	4	5.88
3	人部（送）	3	4.41
4	人部（懷古）	2	2.94
5	人部（俠少）	2	2.94
6	人部（宴集）	1	1.47
7	人部（感慨）	1	1.47
8	人部（交遊）	1	1.47
9	人部（述懷）	1	1.47
10	人部（贈）	1	1.47
11	人部（美人）	1	1.47
12	人部（貶謫）	1	1.47
13	人部（醉）	1	1.47
14	人部（閨情）	1	1.47
	合計	26	